

姫路駅に到着して、改札口を出ると、乗車証明書
書の持参によりフリーパスでした。姫路の町は、
駅前をはじめすっかり焦土と化しており、大変驚
きました。姫路城は、その姿を残していて、焼け
跡に一本の煙突が異様に目に付きました。それは
銭湯の焼け残りでした。町の住宅跡はブロック塀
が崩壊し、水道の蛇口からは水が出っぱなしで駅
前通りは哀れな姿でした。

復員の時、水兵姿で、約十キロの衣囊を背負い、
衣類、米などを担ぎ、姫路市砥堀の実家まで六キ
ロの道をとぼと歩きながら、実家はどうしたか、
不安な気持ちでした。姫路市野里の陸軍兵舎跡近
くの家まであと二キロの地点で、通り過ぎるタク
シーの運転手から「兵隊さん、良かったら乗って
ください」といわれて、戦争が終わった直後の荒
廃した中で、人情ある人との出会いが、大変嬉し
く思い出されます。

戦争で亡くなられた多くの方々の、ご冥福をお
祈りいたします。

艦船護衛 その生と死

石川県 島野 広

私は大正十三（一九二四）年十月一日、石川県
石川郡石川村字水島（白山市水島町）で父利吉の
三男として生まれました。家業は農業で水田三町
歩を耕作、四人兄弟の三番目でした。家は自作農
家として恵まれた家庭に育ちました。父はかつて
は陸軍の現役兵として輜重連隊に勤務、金沢の最
初の第九師団長の従卒を拝命した、二期間勤務の
模範兵でした。また長兄は近衛第一連隊に勤務し
ていました。

昭和十六（一九四一）年十二月八日の大東亜戦
争開戦時は石川県立松任農業学校在学中でしたが、
最初の繰上げ卒業となり、残り三カ月の授業料を
前納して、慌しく同年十二月二十三日に卒業とな
りました。

昭和十七年五月一日、在学中に受験しました海

軍志願兵として、舞鶴海兵団に入団しました。

兵科は主計兵で、昭和十八年三月に、中国南京の警備隊の附属艇「海十九号」の乗組員となり、主計として調理を担当しました。

昭和十八年六月、舞鶴海兵団付となり、同年七月には駆逐艦「藤波」の艀装員付として派遣されました。

駆逐艦「藤波」は七月三十一日、舞鶴の藤永田造船所で竣工となり、第一艦隊第十一水雷戦隊に編入になりました。「藤波」は同年八月二十日には第三十二駆逐戦隊に編入され、さらに九月には、第二艦隊第二水雷戦隊として横須賀より瀬戸内海まで戦艦「山城」の護衛の任に当たりました。

同年十月十五日、佐伯港を出港、「涼波」と同行動で陸軍甲支隊を南洋諸島ポナペへ輸送する「十二号作戦」に参加しました。艦隊主力艦は、戦艦「山城」「伊勢」それに空母「雲鷹」「隼鷹」などで、行動を共にした作戦でした。

同年十一月五日、ラバウルに着きましたが、米

軍機の雷爆撃を受けて損傷が発生しました。それは右舷中ほどに魚雷が命中し、重油タンクに幅二センチ、長さ十二センチの亀裂が発生し、自艦では修理不可能となりました。

この間、十一月十一日には、再び米軍機の空襲を受け、「藤波」には被害はなかったのですが、僚艦「涼風」が沈没しています。十三日には巡洋艦「阿賀野」「能代」「早波」などの護衛の任に当たり、十五日にトラック島に入港しました。

二十四日にはトラック島を出港し、クエゼリン、ヤクト、ルオット島などを巡航し、ここで陸軍甲支隊二千人をそれぞれこれらの諸島に配備しました。これらの作戦には第十四戦隊の「那河」「五十鈴」「長良」などの軽巡洋艦が参加、もちろん「藤波」も「能代」に率いられて参加するなど、内南洋と内地との間の船団護衛に当たりました。かくして同年十二月七日、サイパンに到着、さらに十九日には「莒崎丸」の護衛をしてトラック島に入りました。

昭和十九年一月二日、「戊二号輸送作戦」が発令され、陸軍の独立混成第一連隊をカビエンに輸送しました。十日には戦艦「大和」を護衛して僚艦「朝雲」と共に内地へ向け出発しました。この「大和」は先の「戊号輸送作戦」中、雷撃による損傷を受けたのです。また航路の途中、米潜水艦に発見され、その追尾を全速で振り切って難を逃れたのです。

こうして一月十五日には呉軍港に入港し、ドックにて修理、整備を受けました。

続いて二月四日、横浜より「三二〇六船団護衛」の任に当たりました。

船団は「暁天丸」「辰羽丸」「瑞海丸」「隆海丸」「新京丸」などで、陸軍の第五十二師団の九千人が乗船しておりました。二月十七日、トラック島まであと一日という海域で「暁天丸」が被雷で沈没、直ちに生存者の救助に当たりました。

さらに「辰羽丸」「瑞海丸」も米空母からの艦載機による雷撃、爆撃により沈没し、二手に分か

れてトラック島へ向かいました。

一方、「新京丸」も三月二日に撃沈され、輸送中の兵員九千人のうち救助された者は僅かに千八百人という惨状になりました。

こうして翌二月十八日、トラック島に入港しましたが、島の環礁は前日の米機のいわゆる「トラック島大空襲」により全く惨憺たるものでありました。二月二十日、空爆で損傷を受けた「明石」を護衛して二十四日にはパラオに入港しました。

また二月二十六日、宇品港を出港、二十九日、沖大東島の南南東二百二十キロ付近で雷撃を受け火災を起こし撃沈された日本郵船所属の「埼玉丸」の救援に「早波」と共に行きました。この「埼玉丸」には陸軍の満州より転用された名古屋編成の第二十九師団（雷部隊）二千三百五十人が乗船していました。

昭和十九年三月二十九日、戦艦「武蔵」が出港の直後に雷撃に遭いました。僚艦の駆逐艦「白露」「満潮」と共に護衛して、四月二日に呉軍港に入

港しました。

次の船団護衛は四月二十一日、十六隻という大船団で、陸軍の第三十二師団をダバオに、第三十五師団をニューギニアへの輸送でした。第三十二師団は「楓」部隊で中国の山西省から、第三十五師団は「東」部隊で同じく中国からの転用の部隊で、船団は上海沖に集結、出航しました。

四月二十六日、ルソン・ラボラック湾北西二百キロの海上で山下汽船所属の「第一吉田丸」が被雷、爆発、「藤波」は乗船していた兵員二千六百人の一部を救助しつつマニラに入港しました。

残りの船団は、五月一日、セレベス島バシンカ泊地に避難し、八日に再出発、九日にワシレに到着しましたが、この輸送における兵員、装備、物資等の損害は非常に大きく、その後のオーストラリア方面に対する作戦に大きな影響を与えたと言われています。

五月十一日、油田地帯であるバリクパパンに回航となり、油槽船「栄邦丸」「興川丸」「万栄丸」

などの護衛をして十八日にタウイタウイに入港し、しばらくここで船団護衛の訓練が実施されました。六月七日、タウイタウイの哨戒に出ていた「早波」が米潜ハーダーの雷撃により沈没しました。

六月十五日、「あ号作戦」が発動され、これに参加となります。いわゆるマリアナ沖海戦で、六月十九日に決戦の日を迎え、艦橋には「乙旗」が掲揚され一同奮い立つ思いでした。この海戦で空母「大鳳」が沈没しました。

この海戦後の六月二十二日、沖縄の中城湾に入港しました。翌二十三日、油槽船「旭東丸」を護衛してシンガポールからマニラに着きましたが、東亜海運所属の「旭東丸」は二十九日に六連島の北西八キロ地点で触雷で沈没しました。

続いて七月二日、シンガポールを一等駆逐艦「玉波」と共にマニラに向かいましたが、ルバング島西方で米艦載機の攻撃を受け、「玉波」は轟沈状態で、生存者は皆無の状態でした。「藤波」は同月九日にはマニラに着きました。

七月十九日、呉入港、八月六日門司港を出港して次の船団護衛の任務に就きました。

それは八月八日から始まった「七一船団護衛」の作戦で、二十隻に及ぶ大船団でした。護衛の兵力は空母「大鷹」を含め「藤波」「夕風」海防艦五隻でした。この船団には北支にいた陸軍の第二十六師団で、華北の治安作戦からフィリピンへ転用となった名古屋編成の「泉」部隊が乗船しており、この部隊は十月にはレイテ島に配備されました。

その間、「藤波」は、八月十五日に馬公に入港、十七日に同港を出港しました。しかし、翌十八日、空母「大鷹」が沈没、その他の艦船にも大きな損害を受けました。八月十九日に、遭難者の二千二百六十七人を救助し、二十二日にマニラに入港しました。このとき救助された、ある連隊長は、多くの部下を失い、自分一人助けられて、船上で男泣きに泣いていたのを見ました。戦場での悲哀でも言いますか、なんともいえない沈痛な光景で

した。

その後、九月一日には、さらにシンガポールに入り、リングガ泊地では、現地における集中訓練を受けました。

そうこうしていた十月十一日、艦隊は補給、休養のため再びシンガポールのセクタ軍港に入港し、十四日にはリングガ泊地へ回航、十八日にはこのセクタ軍港よりボルネオのツルネイに向けて出撃しました。

それより前、私は、先の七月十九日、呉軍港に帰港時、高等科練習生の制度が新設されたのに伴い受験、その結果、予定者として舞鶴海兵団に入団を命ぜられ、第四補充部に仮入隊のため「藤波」の出港前に退艦することになりました。この高等科練習生は、特修兵としてマークを着け、各兵科とも重要な部署に配置されることになっていました。

長年、乗艦していた駆逐艦「藤波」は、私の下艦後、比島沖海戦に参加、シブヤン海で被爆した

「早瀬」の救難に向かう途中、米空母艦載機の猛攻を受け、十月二十七日、シブヤン海にて沈没しました。生存者は一人もいなかったといえます。この「藤波」は十二月十日に除籍になっておりません。

かくして私は、十一月十七日、練習艦「香椎」に便乗して舞鶴海兵団勤務となりましたが、幹部練習生の入校に遅れたため練習生を取り消されました。

昭和二十年になって、一月には舞鶴鎮守府司令部勤務、七月には舞鶴海兵団勤務のまま終戦を迎え、九月に小松航空隊勤務を経て、十月に復員いたしました。

今でも忘れられないのは、度々の船団護衛に、敵潜の魚雷攻撃などを受けて沈没した輸送船から脱出し、あるいは投げ出された陸軍兵士たちは、背中に救命具を着けてはいましたが、死者も、負傷者も、生存者も、艦船から浮き上がった浮遊物と共に、潮に流され、救助を待つている姿でした。

いつになるのか、どこまでこうしているのか、当てもない波の流れのままに、見渡す限りの海原一帯に漂流している姿でした。死ぬまで忘れられない出来事でした。

復員後、私は、小松製作所、金沢税務署などに勤務しましたが、昭和二十五年に警察予備隊創設により入隊、二十七年、海上警備隊(海上自衛隊)に転官し、同四十九年十月、一等海尉で定年退官、その後は、平成元年に定年退職まで石川製作所に勤務しました。

駆逐艦「藤波」主要目

排水量 二五二〇トン、全長 一一九メートル、
最大幅 一〇・八メートル、
出力 五二、〇〇〇馬力、速力 三五ノット、
魚雷 p三式 一六本、乗員 二二五人